View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

2010年
11月17日
水曜日

自己分析への疑問

山田　仁　准教授（イギリス文学）

就職活動を始める際、多くの学生が自己分析や適職診断を受ける。ネットにおける関連サイトが、その需要の多さを示している。それらに共通する前提は、「自分」が固定的で不変の存在であるということである。自分が常に一貫した不変の存在であるという体験への揺るぎない信念が、自己分析や適職診断を支える。

そもそも「自分」は、不変で一貫した存在だろうか。二元論の危険を敢えて冒しながら、人間を肉体と精神に分けて考える。諸説があるものの、ヒトの肉体は約六十兆個の細胞から構成されている。新陳代謝によって、古い細胞が死に新たな細胞が生まれる。各器官によって差異はあるが、骨も含めて体内で大方の細胞が更新されるのに、約二年半を要すると言われている。従って、二年半前のヒトの肉体はもはや今の肉体とは別物であり、二年半後の肉体は今とは全く別の物質になっている。確かに遺伝情報や肉体的特徴は引き継がれるが、肉体そのものは刻々と老化していて、不変の存在としての「自分」を保証するものとはなりえない。

精神は、生活環境などの外的要因や後天的な経験によって多大の影響を受け続ける。双子であっても性格や精神構造は異なる。家族、友人、職場、学校、コミュニティ、国家や民族など、外的因子が解きほぐせない状態で複雑にせめぎ合う磁場が人間の精神である。従って、どこまでが自分の領域で、どこからどこまでが外的因子からの影響の痕跡なのかを峻別することは不可能である。性格に関して言えば、催眠術を用いて潜在意識を覗き見ると、たいてい複数の人格が現出するという。「性格」は英語で〝personality〟であり、〝person〟からの派生語である。〝person〟の語源はラテン語の〝persōna〟（仮面）である。古代演劇の役者は、演じる劇に応じて仮面を付け替えた。古代人は、移ろいやすい変化の基軸で性格や個性を見ていたのである。

自分とは固定的でなければ不変でもなく、刻々と変化している動的なものと理解する必要がある。本当の自分など存在しない。この前提で就職活動の話題に立ち返ろう。自己分析や適職診断は、今現在の束の間の「自分」についての分析であり診断である。自己分析や性格診断は、数年後の自分を診断する器用さを持ち合わせていない。だが大学生は卒業後数十年間就労し続ける。長い将来にわたって従事し続ける職業や仕事を、今現在の自分という束の間の脆弱な基準に基づいて決断していいのだろうか。

自分にあった仕事を探すべきではない。自分に仕事を適合させてはいけない。仕事は決してあなたに合わせてくれない。ならば、あなたが仕事に合わせるべきである。あなたは、これからも刻々と変化してゆくからである。あなたと仕事のベスト・マッチングは、仕事にあなたを変えてもらうことによって図られるべきである。与えられた職業や仕事を自分のものとして受け容れる柔軟さ、忍耐強さ、そして謙虚さが求められる。そうすれば、仕事があなたを「あなた」へと育ててゆくであろう。■